

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 動物応用科学科

職階 准教授

氏名 水野谷 航

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

動物応用科学科の中で伝統的な畜産学に根付いた学問分野を教育する責任を感じている。畜産学も幅広い学問であるが、私は畜産物利用学（基本的には家畜由来の動物性食品科学）教育を専門分野としており、担当授業科目もこの学問を幹としている。さらに他大学との比較で述べると、本学では食肉加工施設が充実しているため、この施設を活用した内容を取り入れている。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
食品製造学	動物応用科学科	選択	3	98
食品科学	動物応用科学科	必修	2	164
食品科学実習	動物応用科学科	選択	3	70
畜産物利用学	獣医学科	選択	3	145
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	7
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	4
卒業論文	動物応用科学科	必修	4	4
基礎ゼミ	動物応用科学科	必修	1	32
生物学実験	動物応用科学科	必修	1	136
畜産物利用学特論	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	1	5
動物生命科学特別研究V-II	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	2	4
動物生命科学特別演習V-II	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	2	4

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

学生にとってなぜ学ぶ必要があるのかを自覚できるような教育を目指す。大学・大学院教育は義務教育ではない（つまり学生からすると教育は与えられるものではなく自ら得る）ことを学生が自覚し、自主的な学習意欲を高める事が重要である。一方で私立大学である以上、授業料に見合う教育サービスを、それを望む学生（あるいは学費支援者）に与える点も忘れてはならないと考える（つまり、私立大学は塾や家庭教師の要素も含むと考える）。この両者は時に対立する命題である。教員はこの両者のバランスを見つつ、かつ時代背景にも配慮しながら対応する必要があると感じている。また、時代によって変わる以下の要因：学生の基礎学力、産業規模（私の場合は畜産業、食肉関連産業、食品産業）、教育内容のアップデート項目、教育システム（リモート講義等）にも、臨機応変に対応していく方針を持って教育に取り組んでいる。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

学生にとってなぜ学ぶ必要があるのかは自分で手を動かし学習をすることで促されると考え、アクティブラーニングを重要視している。特に私は以下のようにICTを活用したアクティブラーニングを取り入れていて、これが自身の特徴である。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

講義の時間中に10分程度で回答ができる課題を提示し、講義時間内に学理に提出する手法を採用した。またMentimeterというオンラインアンケートツールを利用し、クイズ大会の形式で講義内容の小テストを実施した。匿名で参加できるため、気軽に参加できる点で有用なツールである。この方式はエンターテインメント性が高いため、講義の緊張感を和らげる効果も得られた。

(2) ICTの教育活用

有

授業の録画をMeetで行っていることを利用して、新型コロナウイルス感染等の理由で対面受講ができない学生に対して特別にMeetで参加することを許可した。すなわち簡易的なものであるがICTを利用したハイブリッド授業の実施ができた。これはコロナ禍においてICTツールが発達した副次的な効果と言える。本学では学生はタブレットまたはノートPCを全員が所持しているため、上記アクティブラーニングもこれらの端末を利用して行った。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

今年度は自身がコーディネーターの科目の成績評価で定期試験と平常点のうち、平常点の比率を前年度より高め、普段の授業に真摯に取り組む学生が高評価を得られる方式に変更した。また、授業時間内の課題については内容を吟味し、受講生が取り組みやすい課題設定を意識した。授業内容の理解度については毎回、授業時間外に取り組む小テストを行うことである程度把握できた。この小テストが自主学習のきっかけになることを期待して行った。Mentimeterで授業時間内に質問を受け付けるようにして、次の授業でその質問に回答するサイクルがうまくできた。自学自習を促す工夫が今後の課題である。

(2) 学生の理解度の把握

A

上述のMentimeterというオンラインアンケートツールで前回の小テストの復習を実施している。この結果から授業の理解度を推し量ることができる。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

A

授業時間外で実施する小テストを課している（30分間）。小テストは原則として次の授業開始までに取り組むこととしている。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

Mentimeterで授業時間内に質問を受け付けるようにして、次の授業でその質問に回答するサイクルで取り組んでいる。

(5) 双方向授業への工夫

A

上述のMentimeterというオンラインアンケートツールは学生と双方向でコミュニケーションが取れる機能を有している。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

授業時間以外の学習時間がどの担当科目も低い評価であったので、Azamoodleの小テストは全ての授業実施回で授業時間外に実施するように設定した。また好意的な評価を受けたポイント（mentimeter等のactivity）については継続した。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

引き続き、学生の意見を取り入れつつ、学生にとって魅力ある講義を作っていきたい。

(3) (2) を踏まえた次年度の取組

Azamoodleの小テストは受講者が8割を超えているため継続する。また好意的な評価を受けたポイント（mentimeter等のactivity）について継続する。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

学生の質問に真摯に答えるようにしている。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

本項目の客観的な指標は難しい。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

FD研究会には参加するように心がけているが、年々増加する大学業務の都合で出られないことも多い。その場合は、後で映像を見て情報を得ている。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

卒業研究のような時間（単純な授業評価）で縛れない活動も立派な教育活動と思う。特に大学教員は研究者でもあり、研究と教育を上手に融合させていくことが目標である。研究活動を通じて得られる学習効果は座学や多人数での実習を大きく上回ると実感している。